

地域づくりセミナー第1回に参加して

柴田沙緒莉（山口市地域おこし協力隊）

報告① 嵯峨創平氏

嵯峨さんは財団法人日本地域開発センター研究員などを経て、1995年よりフリーランスのプランナー、ファシリテーターとして活動を開始。2011年より岐阜県立森林文化アカデミーの教授を務めている。

本報告では、嵯峨さんがまちづくりに携わっている岐阜県下呂市にある馬瀬地区の事例に焦点があてられた。同地区では、1994～96年にかけて馬瀬川の水質が悪化したことなどをきっかけに、馬瀬森林山村開発活性化研究会が設立された。そして地域全体を公園に見立てたフランス発祥の「地方自然公園制度」をモデルに、馬瀬の美しい里山景観を生かした村おこしとして「馬瀬地方自然公園3ヵ年計画」を策定。景観整備、看板の設置、見どころマップやポスターの作成を行ってきた。また、溪流では例のなかった「溪流魚付き保全林制度」を設け、景観と同時に生態系の保全にも努め、2007年には「日本で最も美しい村」連合に加盟。その後の「5ヵ年計画」では、「馬瀬川の鮎」ブランド化や、ウォーキングツアーの実施などに取り組んできたが、一方、ガバナンスの弱さや補助金事業への依存、住民への浸透などが課題として残っているという。

こうしたなか森林文化アカデミーでは、馬瀬地方自然公園づくり委員会から委託を受け、馬瀬の西村地区において「森づくり基礎調査」を実施してきた。溪流沿いの生態系調査だけでなく、社会資源調査として、自然と共存しながら生活を営む住民への聞き書きを行うことで、自然資源と社会資源のつながりを浮き彫りにする活動である。それを基に、ありふれた観光ガイドマップではなく、人の自然のふれあい調査の成果として「ふれあいマップ」を作成したのだが、その狙いは、高齢者から子ども世代への伝承やモニターツアーへの展開、住民自身の気づきと自信の醸成につなげていくことにある。

私自身も学生時代、聞き書きの経験を何度かしてきた。また、聞き書きの事例もいくつも見てきたが、それぞれテーマや形式にちがいはあれど、成果物として文章を残すという点で共通しているものが多かった。そういった中で、聞き書きによって明らかになった内容を地図にまとめた「ふれあいマップ」は、普通の暮らしの中によそ者が入っていくためのツールになるといった点において画期的であると感じたし、今後参考にさせていただきたい。

嵯峨さんは最後に、最新の動向を紹介された。馬瀬ではそういった一連の調査や取り組みを基に、2014年5月に「馬瀬里山ミュージアム」が誕生したのである。ここでは、①教育（ふれあいマップを活用し、里山ならではの知恵や技を体験する教育旅行）、②展示（「里山の暮らし」を見せる環境整備）、③店舗（「景観＋食文化」でおもてなし）、④滞在（移住者のお試し田舎暮らしやアーティストの創作拠点として）に取り組み、都市からの交流人口を増やすことで、地域の活性化を図る。また、下呂市では2014～18年の「馬瀬地方自然公園

第2次5ヵ年計画を進め、「美しい村づくり」と「美味しい村づくり」を2本柱に、経済的自立と住民の参画を促している。集落を維持していくために、文化的景観を保存・管理していくだけでなく、草の根型の「里山ミュージアム」と経済型の「観光DMC」の両立を目指し、「参加×資金の循環」を図っていく試みである。

現在、馬瀬地区には「地域おこし協力隊」も入っており、よそ者の視点と力を取り入れている。嵯峨さんは、「よそ者が里山で生きていくには『予測できない自然』と『手間のかかる暮らし』を楽しめるかが重要」とおっしゃった。これまで協力隊をはじめ、多くの地域活動に従事している方にお会いしてきたが、それぞれ個性や得意分野に差異はあれど、当然「田舎暮らし」は嫌いという人はひとりもない。何かしら田舎暮らしの楽しみ方を知っている人ばかりだ。そしてよそ者でも、暮らしや自然と真摯に向き合い楽しみながら活動していれば、住民も力を貸してくれるようになる。そういったいい連鎖を生み出すことは、まちづくりの第一歩にもなり得るのだろう。

報告② 浅野健氏

都市計画・まちづくりコンサルタントとして、名古屋を中心に東海地方で活躍する浅野さんは現在、四間道・那古野界隈のまちづくりに携わっている。報告ではまず町の成り立ちについて説明があった。名古屋市中村区、西区、中区にまたがるこの地域は、江戸期に城下町の移転とともに形成され、名古屋で最も歴史の古いといわれている堀川・円頓寺3商店街を有している。屋根の上に神を祀る「屋根神」の文化も色濃く残っており、「菓子王国なごや」を牽引する菓子産業集積地でもある。名古屋の歴史や産業の詰まった地域であり、30年前には名古屋市町並み保存地区にも指定されている。

しかし人口は昭和30年代の2万人から1万人へと半減し、2015年4月には地区内の3つの小学校が統合。伝統的建築物も4割以上姿を消すなど、町並みの変化は免れなくなっている。そういった危機感から、2000年頃より「ものづくり文化の道推進協議会」などさまざまな団体が設立され、2012年10月には「四間道・那古野界隈まちづくり協議会」が設立された。現在会員は、2つの学区、商店街、まちづくり活動団体など、14団体。浅野さんは事務局として携わっている。基盤となるまちづくり構想は、「名古屋のルーツを語り、新たな文化を紡ぎ出すまち」を理念とし、①「歴史・文化」（まちのかたちをみんなで守り、伝え、創る）、②「にぎわい」（地の人も越してきた人も行きかう人も集い、楽しむ）、③「安心・安全」（災害と共に考動し、助け合い、暮らす）の3つを方針に掲げている。具体的には、県文化財である川伊藤家の周知、商店街の活性化、菓子産業集積地のにぎわいづくり、地域の人にとって思い入れのある那古野小学校跡地の活用などがあげられた。これまでの2年半で地域の課題の洗い出しや意見交換、現地見学などを徹底し、構想をしっかりとつことで今後、地域でコンセンサスを得ることを目指す。とはいえ、あるメンバーの言葉を借りれば「境界線のまち」といわれるほど複雑なエリア分けがなされている地域であるため、今年4月からも2団体まわるなど、構想の周知に力を入れているという。

浅野さんはこうした展開のなかにも現在の課題を指摘する。すなわち、住まいやコミュニティを脅かす、名古屋駅方面からの開発の波にどう対応するか、厳しい経営が続く菓子問屋やメーカーが多い中で、どう対処するか、どうPRするかといった課題である。昭和30年頃がピークだったという商店街も、今後は単なる買い物をする場所としてだけではなく、地域貢献が必要とされる。すでにテナントの中に高齢者福祉施設を設け、ランチやトイレを提供するなどといった取り組みもある。周辺のこのような動きがある中で、まちづくり協議会も今後会員を増やしていく予定であり、また、これから外国人のおもてなしにも力を入れていくために、四間道・那古野界限にある名古屋国際センターにもオブザーバーとして関わっているとのことであった。

四間道・那古野界限のまちづくりにおいて、幅広い取り組みの中でも、それぞれの作業部会にリーダーを設け、それぞれの持ち場を高めながら、定例会で共有することで、横の連携を図っている。また特筆すべきは、住宅都市局や緑政土木局など、行政の各セクションも可能な限り定例会に参加しているという点である。そういった行政の積極的な携わり、地域のキーパーソンや専門家の取り込み方などが、まちづくりの土台を広く深いものになっているのであろう。浅野さんはそのために、構想を明確にすること、そしてPRの機会を逃さないことを徹底してきている。幅広い賛同と協力は、そういった地道な努力の積み重ねと、浅野さんの人を惹きつける人柄・人徳の賜物であると、今回の報告を聞いて感じた。

また、浅野さんも課題としてあげていたように、名古屋の中心部からの開発の波によってまちの姿が変わることは不可避だが、浅野さんは「まちが変わっても人のつながりは変わらないことを信じる」とおっしゃっていた。私自身、自分のフィールドで活動する中で、人のつながりがなくなったときこそ集落の終わりだと感じている。逆に、つながりこそが自分の原動力になっているともいえる。「人のつながりを信じる」という根本の部分で、大事にしていきたいと改めて感じた。

全体として

本セミナーでは冒頭に、36名の参加者が各々簡単な自己紹介を行った。名古屋を中心に東海各地から、大学教授やNPOの方、市役所勤務の方、学生さんなど、年代も職業も様々な面々が集まった。商店街の活性化や空き家利活用、若者の就労支援など、興味や専門分野も多種多様であった。私自身今回は、お二方の報告から、何かしら自分の活動におけるヒントを得たいと思い、今回のセミナーに参加した。また、他地域でまちづくりに従事されている他の参加者の方々とつながることで、いい刺激が得られたら、という思いもあった。実際に私が山県市から来たというと、「山県の〇〇さんにお会いしたことがあります」、「以前別の方に、山県の冊子いただいたんですよ」と声をかけてもらえることもあり、思わぬところでつながることがあると実感することができた。こういった地域づくりに関するセミナーや研修は、いわゆる「大先輩」方から学ばせていただくだけでなく、横のつながりを築いていく貴重な場であると改めて感じた。